

2. 現在までの研究状況 (図表を含めてもよいので、わかりやすく記述すること。様式の改変・追加は不可(以下同様))

- ① これまでの研究の背景、問題点、解決策、研究目的、研究方法、特色と独創的な点について当該分野の重要文献を挙げて記述すること。
 ② 申請者のこれまでの研究経過及び得られた結果について整理し、①で記載したことと関連づけて説明すること。その際、博士課程在学中の研究内容が分かるように記載すること。「4. 研究業績」欄に記載した論文、学会発表等を引用する場合には、同欄の番号を記載するとともに、申請者が担当した部分を明らかにして記述すること。

本研究の中心的対象は、スウェーデンの女性作家で、北欧「九十年代」文学を代表するセルマ・ラーゲルレーヴ(Selma Lagerlöf, 1858-1940)である。北欧では、19世紀後半、農業・鉄工業・金融・交通などの分野で近代化が進み、都市化、アメリカ移民、農村の空洞化などが深刻な問題となった。G.ブランデス、H.イプセン、A.ストリンドベリなどに代表される「八十年代文学(自然主義文学)」は、進歩主義・啓蒙主義・科学中心主義の立場から、そうした諸問題を直接的に書き、批判した。これに対して、「九十年代文学(新ロマン主義文学)」は、F.ニーチェやS.フロイト、デカダンスの影響のもと、理性では捉えられないものや今目の前にないもの、すなわち、空想や過去、異国などを書き、また人間の生を肯定的に描いた。ラーゲルレーヴのデビュー作『イエスタ・ベルリングのサガ』(1891)は、「九十年代文学」の代表作である(J.グラウザー編『スカンディナヴィア文学史』、2006)。作家は、『エルサレム』(1901-02)で、女性初・スウェーデン人初のノーベル文学賞を受賞し(1909)、社会科の教科書として執筆した『ニルスの不しぎな旅』(1906-07)は80カ国以上に翻訳された。民話・神話を思わせる作風が多いことから、北欧では長く「お話おばさん(民話を口承する女性)」として親しまれたが、1980年代以降は、ジェンダー論的観点から論じ直す動きが始まっている(V.エードストレーム『生の離れ業』、1996、L.ステンベリ『天才の遊び』、2001、M.カールソン『感覚の声』、2002など)。

申請者は、東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学専門分野の藤井啓司元助教授(2000年4月~2005年8月)、松浦純教授(2005年9月~)、ベルリン・フンボルト大学(ドイツ)のS.v.シュヌアバイン教授(2007年4月~2008年2月)、ウプサラ大学(スウェーデン)のJ.スヴェドゥイェダール教授(2008年3月~9月)の指導のもと、ラーゲルレーヴを「近代」という問題関心を軸に論じてきた。この間、日本における北欧近代文学研究の礎を築き、ドイツ・北欧両文学研究を双方に有意義な形で両立させ、世界の北欧文学研究に日本の研究者独自の立場から貢献することを目的に、以下の二点を有効化するテーマ・観点を模索した。

- A.独文科出身の日本人研究者として、日本史・日本文学、ドイツ史・ドイツ文学と本研究を関連付けること
 B.北欧・ドイツのラーゲルレーヴ研究者と問題関心を共有すると同時に、新しい視点を提示すること

Aのために、日本とドイツにおける北欧(文学)の受容を研究した。今日の日本において、北欧には、「牧歌的な理想国家」というイメージが、ラーゲルレーヴには、北欧の「良心」を代表する「母性的・幻想的な平和主義作家」というイメージが定着している。日本の北欧学研究では、それらの原因を北欧に対する知識の浅さ・研究の少なさに求める傾向がある。これに対して、申請者は、ラーゲルレーヴが「児童文学」および「キリスト教文学」を中心に、百年にわたって邦訳され続けている(N.トゥンマン『日本におけるラーゲルレーヴ』、1998、上原進「セルマ・ラーゲルレーヴ邦訳リスト」、未刊)ことに着目し、ステレオタイプのイメージは、翻訳や研究の少なさによってではなく、受容者の関心のあり方や思想的背景の一様性ないし限局性によって形成されるとの仮説を立て、受容のあり方とその背景となった時代潮流・思想を考察した。一方、ドイツにおいて、北欧(文学)は、19世紀・20世紀の民族主義運動の高揚の中、ゲルマン民族(インド=ヨーロッパ語族・「アリア人」)の故郷として理想化された(B.ゲンティコフ『資本化以前の牧歌としての北欧』、1978、松村一男『神話学講義』、1999)。ラーゲルレーヴも、個人としてはナチズムに反対したものの、ナチス政権下での人気は高かった。このことから、申請者は、ラーゲルレーヴとナチズムの共通点の考察という、Bにつながるテーマを導き出した。

Bのために、まずは、作品内に見られる「近代」を論じ、ラーゲルレーヴの同時代批判のあり方や、近代人としての問題意識を考察することで、「お話おばさん」像の払拭を試みた。また、スウェーデンで、ジェンダーの観点からラーゲルレーヴが論じられる際、作家は、「女性解放の先駆者」として評価されることが多い。これに対して、申請者は、ラーゲルレーヴの魅力とされる「善意」や「倫理」とナチズムの共通点を明らかにし、そこから、ナチズムのみならず文明が根源的に有する支配・被支配の構造に対する問題を提起した。同時に、「ネガティブなもの」として書かれている「障碍」や「狂気」などが、「ネガティブ」であるがゆえに、「ポジティブなもの」は持ち得ない可能性を秘めたものでありうることを指摘し、そこに、作品の民族主義や近代国家からの離脱の可能性を追究した。2009年7月に提出予定の同論文(一部は雑誌に掲載または学会で発表されている)は、概ね以下のような内容である。ここでは、今後の研究に関わる『イエスタ・ベルリングのサガ』論および『エルサレム』論について詳述し、その他の項目は目次の提示にとどめる。

第一部 日本における北欧受容—セルマ・ラーゲルレーヴを中心に(①で発表)

- (1) 新劇運動における北欧演劇(イプセン、ストリンドベリ、B.ビョルンソン)の翻訳・上演
 (2) 平塚らいてうによるE.ケイ受容と『青鞥』メンバーによる北欧児童文学の翻訳
 (3) 内村鑑三によるE.ダルガスの紹介と、無教会グループによるデンマークの教育システム(フォルケ・ホイスコーレ)への注目
 (4) 『近代文学』同人山室静のマルクス主義からの「転向」と北欧文学への関心

申請者氏名 中丸 禎子

第二部 ラーゲルレーヴにおける「前近代」—『イエスタ・ベルリングのサガ』論

- (1) 作品と時代背景(近代北欧文学史素描、作品の位置づけ)
- (2) 前近代における正反対のもの的一致と「サガ」という形式(②に掲載)
- (3) 「吊い」としての「物語」
- (4) 近代人＝異端者としての語り手と作者((3)とあわせて③に掲載、(2)~(4)を⑩、⑫で発表)
- (5) ドイツにおける北欧文学とラーゲルレーヴの受容 (⑬で発表)

『イエスタ・ベルリングのサガ』(*Gösta Berlings saga*, 1891)は、近代化以前の1820年代、作者の故郷ヴェルムランドを舞台とし、その美しい自然や、昔ながらの暮らし方で生きる人々を叙事的に描いた作品である。他の「九十年代文学」と同じく、同作も、その「幻想的」な筆致から、「現実逃避的」作品とされてきた。第二部では、同作におけるスウェーデンの近代化の描かれ方と、それに対する作者の問題意識を考察した。すなわち、1820年代のヴェルムランドは、牧歌的に描かれているのではなく、美と野蛮、善と悪、強さと弱さといった、「正反対のものが一致」する前近代的な空間である(このことから逆説的に、作家が、近代を、ものごとを二項対立的に分ける時代と規定していることが分かる)。その世界は、語り手が物語を語る「現在」においては、すでに滅んでいる。そのことは、作品の最後にヴェルムランドを統べる老女が死去することで示される。語り手は、啓蒙的理性と科学的精神を持つ近代人でありながら、伝え聞いたままを語る口承文芸の形式(「サガ」)によって、清濁併せ持つ前近代を、自身の思考や批判を交えずに叙述する。それは、前近代と同じ方法で「語る」ことで、失われた共同体を「吊う」ためである。一方、主人公イエスタは、老女の世界を破壊する「トリックスター」として機能する(L.ハイド『トリックスターの系譜』、1998 参照)。老女が自らイエスタを受け入れ、死に際して「本当の生」を実感する描写には、新しいものが古いものに取って代わることを良しとする、作者の近代的価値観が見られる。

第三部 ラーゲルレーヴにおける「近代」—『エルサレム』論

- (1) 死者たちの「救済」と作品の「予型論」的構造(⑦に掲載、⑮で発表)
- (2) 農民像・女性像に見られる「血と大地」思想(⑥に掲載)
- (3) 「民族叙事詩」からの離脱の可能性—太陽・狂気・預言(⑤に掲載、⑯で発表)
- (4) 「死」と「天啓」—近代スウェーデンの死生観との比較(⑦に掲載)

第三部では、ノーベル賞受賞作『エルサレム』(*Jerusalem*, 1901-02)において、ラーゲルレーヴ文学の魅力とされる「善意の成就」と「救済の達成」が、ドイツ民族主義とどのような共通点を持ち、またどのようにしてそこから逸脱するのかを考察する。同作は、スウェーデン・ダーラナ地方の農民37人が、宗教上の理由からエルサレムに集団移住するという史実(1896年)に取材した長編小説である。作品は、主人公の父の青年時代を書いた導入部と、教区に新しい教派が浸透し、農民たちがエルサレムへ旅立つまでを描いた第一部『ダーラナで』、彼らのエルサレムでの生活とその間のダーラナを描いた第二部『聖地にて』から成り、信仰のために故郷を捨てる農民たちと、屋敷と農地に執着してダーラナにとどまる富農イングマルが対比されている。

同作は、導入部で描かれる主人公の父の人生の構図と、本編で描かれる主人公のそれが同じという「予型論」的構成を取り、同じ人生の繰り返しを提示することで、人間の生と死を、「命の始まりと断絶」ではなく「命の継承」として描く。エルサレム移住によるダーラナの家族的共同体の崩壊や、当地における移住者たちの熱病による死や発狂という「惨事」は、この「予型論」的な作品構成によって、より良い未来を予感させる「物語」へと転換する。この構造、特に「父から子への命の継承」という構造と強く結びつくのが、「郷土芸術運動」および「血と大地」思想(ナチズムの思想的基盤となったドイツの民族主義運動)でも好まれた「農民」・「農耕」のモチーフである。このモチーフは、一見、文明化以前の無垢な人間性を表すようで、その実、「大地」の「農地」化という、文明の持つ暴力性の根源形態を体現し、更には、「男性性による女性性の接収」という性暴力を体現している。導入部においては、主人公の父である農夫が、子殺しをした妻を赦し、彼女を自身の良き妻・子どもたちの良き母とする。子殺しをする女は、人間に生命を与えもし殺しもする「大地母神」を連想させる。ここでは、農夫の、罪人を赦し愛するという倫理の貫徹と、彼による「大地」の農地化＝「大地母神」の馴化がパラレルである。本編においては、主人公の「善意」と「健康」が、彼の姉の「病(脚部麻痺)」と、妻の「呪い(産まれる男児がすべて障碍児の家系とされている)」を「克服」する。19世紀・20世紀の少女小説では、しばしば、障碍(脚部麻痺)が、女性の家への隷従の比喩として描かれる(L.キース『起き上がり、床を担いで歩け』、2001)が、ラーゲルレーヴには、女性人物が障碍など「ネガティブ」な特性を持った者として登場し、男性人物の助けでそれを克服して、良き妻・良き母になるという構造がある。ここには、障碍によって女性の家への隷従が象徴され、更に、その「女性性」が男性によって「克服」されるという、二重の「女性支配」の構造を見て取ることができる。一方、「障碍」、「狂気」、「死」は、常識や人智を超えたものとしても表象される。ある女性登場人物の「狂気」は、他の登場人物からは「事実を認識する能力の欠陥」とみなされるが、物語の中で彼女の予見したことはすべて実現し、作品全体として、「狂気」は、「理性や人智を超えた、真実に触れる能力」として描かれる。また、スウェーデンでは、20世紀に死生観が大きく変化し、「死」は、「自然に還る」ことであるという穏やかで親しみやすい言説が成立したが、『エルサレム』における死は、「惨事」であるがゆえに「天啓」でもありうるという、「正反対のもの的一致」を示している。

3. これからの研究計画

(1) 研究の背景

2. で述べた研究状況を踏まえ、これからの研究計画の背景、問題点、解決すべき点、着想に至った経緯等について参考文献を挙げて記入すること。

博士論文[前記]では、「父の名の継承」に伴って、女性が荒々しさを失い、家庭的になることを、農夫による「大地母神」殺しと捉え、男性による女性支配のみならず、「文明」による「自然」の支配の構造を示すものとして批判した。この議論に関しては、松浦教授より、申請者自身が、文明化以前の「大地母神」を「女性の本来的なあり方」と規定し、「文明」と「理性」を「男性」の側に、「自然」と「感性」を「女性」の側に位置づける結果を招いているとの指摘を受けた。今後は、「男性対女性」、「自然対文明」という、日常的に用いられる二項対立の枠組みそのものを、学術的観点から相対化する必要がある。申請者は、すでに、「日常的な枠組み」を超越するものとして、「障碍」、「狂気」、「死」を論じた。これらの議論を発展させると同時に、その成果・方法を「大地母神」論に援用しようとした際、申請者が注目したのが、「大地母神」を「跛者」(「脚部障碍者」と関連付けた種村季弘『畸形の神』(2004)である。同書では、他に、放浪、鍛冶屋(大工、錬金術師)、水(海、洪水)、酒、飛行、荒地(森、孤島)、性的虚弱なども「脚部障碍」と関連付けられるが、これらはいずれも、ラーゲルレーヴが繰り返し扱うモチーフである。同書は一般向け書籍という性質上、やや学術性には欠けるが、本研究が一見関連の薄い諸モチーフを、学術的に関連付けることができれば、ラーゲルレーヴ文学のみならず、ヨーロッパの文明像・障碍者像に対しても、新たな視点を与えることができる。また、申請者はドイツ滞在中、シュヌアバイン教授のゼミナール「北欧文学におけるユダヤ人の表象」(フンボルト大学、2007年度冬学期)に参加し、近現代の北欧文学において、「病」および「性的倒錯」が、しばしば、「ユダヤ人」の表象として用いられたことを知った。同ゼミナールでは、ラーゲルレーヴへの論及はなかったが、申請者は、上記の諸モチーフとユダヤ人の表象を「病・障碍」およびジェンダー論的観点を紹介して比較することで、作家研究および北欧文学におけるユダヤ性研究に貢献できると考えた。

本研究では、諸モチーフを近代北欧文学と神話・民話原典との間で比較する。申請者は、古澤ゆう子教授のゼミナール(東京大学、2000年度)で、神話と近代文学の比較という問題関心を知った。神話・民話は、近代文学によって受容・表象される際、原典の一部が誇張あるいは削除されたり、解釈・意味づけされたりするなどの変化を被る。この「変化」は、それ自体が、近代の特質を表す。本研究は、近代文学と古典文学における同モチーフの共通点・相違点を考察し、近代における「脚部障碍者」像の特色と、その成立の過程を明らかにする。

(2) 研究目的・内容 (図表を含めてもよいので、わかりやすく記述すること)

- ①研究目的、研究方法、研究内容について記述すること。
- ②どのような計画で、何を、どこまで明らかにしようとするのか、具体的に記入すること。
- ③共同研究の場合には、申請者が担当する部分を明らかにすること。
- ④研究計画の期間中に異なった研究機関(外国の研究機関等を含む)において研究に従事することを予定している場合はその旨を記載すること。

博士論文をスウェーデン語で発表する準備を整える(このため、短期的にスウェーデンに赴く)と同時に、ラーゲルレーヴをはじめとする近代北欧文学における「脚部障碍」を、ギリシア・北欧の神話・民話と比較しつつ考察する。「脚部障碍」をテーマとして取り上げる理由は、以下の二点である。一点目は、そのヴァリエーションの多くが、ラーゲルレーヴ作品に頻出するからである。一见関連の薄い諸モチーフを、「脚部障碍」というテーマのもとに関連付けることで、ラーゲルレーヴ文学に対する新たな視点を得ることが期待できる。二点目は、「脚部障碍」は「山羊脚」の悪魔のイメージと結びついて、ヨーロッパにおける他者排除を象徴的に示していると考えられるからである。ナチスが、ユダヤ人をはじめとする異民族、障碍者、ホモセクシュアル、浮浪者などを、いずれも「劣等」とみなして排除したことは周知の事実である。その際、目に見える「障碍」を持たないユダヤ人に関しても、民族自体に対して「障碍者」の比喩が用いられた。また、スウェーデンにおいては、福祉政策の名の下に、障碍者の断種が行われていた。このことから、ある集団を「劣等」と見なし、種として排除する動きは、ナチス・ドイツに限ったものではなく、こと「障碍者」に関しては、その排除を押しとどめる動きは少なかったと考えられる。

本研究では、こうした「障碍者」像の背景を、広くヨーロッパの神話・民話・伝説、歴史的事実、文化に求め、その起源を文学における「障碍者」像から考察する。古澤教授によれば、ヨーロッパ中世における「山羊脚」の悪魔のイメージは、ギリシア神話のサテュロスに由来する。サテュロスは、官能性の象徴であり、キリスト教モラルを逸脱する存在である。また、魔女も、背中の曲がった老婆として表象される。こうした表象において、「身体障碍」は、内面の「醜さ」や「悪」を映す鏡と考えられていた。一方、近代以前において、身体障碍者は、「つまはじき者」とであると同時に、特殊な能力を備えた存在でもあった。たとえば、北欧神話の主神オーディンは、宇宙を統べる智慧を得る代償として片目を失う。同じく北欧神話の鍛冶屋ヴェルンドは、脚の腱を斬られているが、屈指の金細工師である。ギリシア神話の鍛冶の神ヘパイストスは、醜い容姿のために母神ヘラに嫌われ、天界から投げ落とされて脚部に障碍を負うが、神々や英雄のために数々の芸術作品を作り出す。このように、ヨーロッパには、「障碍者」=「天才」、「芸術家」、「神(あるいは神性を持つ者)」という像もあった。本研究では、「障碍者」が、近代においてどのように両義性を失い、「つまはじき者」とされて排除されたのか、あるいは、「両義性」を残された部分があるのか、あるとすればそれはこういった部分かを、「脚部障碍」と関連する「大地母神」、

申請者氏名 中丸 禎子

「狂人」、「ユダヤ人」に即して考察する。

(1)大地母神

「大地母神」は、旧石器時代以降の地中海世界で、大地が女神として神格化されたもので、手付かずの自然が人間に恵みと災いの双方をもたらすように、「生命の授与と剥奪という相反する二つの面」を持っていた。しかし、こうした太古の信仰をオリュンポス文明が支配すると、「大地母神」の「二つの面」は、個別の女神たちへと分散され、女神たちは天界を統べるゼウス神よりも下位に置かれた。西洋中世にいたって、その「生命の剥奪」を司る部分は、「魔女」として忌避の対象となった(西村賀子「魔女のルーツを西洋古典文学にさぐる」2004)。即ち、「大地母神」は、「文明」によって抑圧・排除され、しかし依然としてその底流をなし続けたのである。申請者は、「大地母神」の表象に、「文明」による他者排除のあり方の典型を探ると同時に、「大地母神」が排除されつつ底流をなす存在であるが故に持つ、「文明」の枠組みを超越する可能性に着目し、主に以下の三点を論じる。

一点目は、異世界との往還能力である。西村によれば、「大地母神」は、他界との媒介の象徴としての飛行能力を持ち、死者の魂を冥府に運ぶ存在と見なされていた。ラーゲルレーヴ文学においては、「脚部障害」が、異世界との往還につながる。作家は左足に障害を持ち、歩くことのできなかった幼少期に、「楽園の鳥」に会うために「立ち上がって、歩いて」行ったというエピソードを披露している(自伝『モールバック』、1922)。「楽園の鳥」とは、脚のない孔雀の剥製のことである。ここには、「脚がない」、「歩けない」ということ(「脚部障害」)が、「楽園」を飛ぶ翼を持つ、即ち、現世と「異世界」を往還する能力を持つことだという、「正反対のもの的一致」(博士論文第二部参照)が見られる。空想世界、キリスト教的楽園、死後の世界など、日常世界の外をしばしば問題にするラーゲルレーヴ文学において、その世界との往還を保証する「脚部障害」が、「大地母神」とどのように関連しているのか、またそれが同時代の北欧文学の「脚部障害」とどのような共通点・相違点を持つのかを考察する。

二点目は、「大地母神」あるいは「魔女」を思わせる老女と、「脚部障害」を持つ若い男性との関わりである。種村は、脚部障害を持つ神へパイストスが海の女神テティスに育てられ、大地の女神ガイアと子をもうけたこと、「腫れた脚」という意味の名を持つオイディプス王が荒野をさまようこと、鍛冶能力を持つ小人(「小人」と「せむし」は、近代以前の代表的「障害者」である)ダクテュロスが大地の女神レアから生まれたことなどから、「大地母神」と「脚部障害」に深い関わりがあるとみる。また、ラーゲルレーヴと同時代のイギリスの神話学者フレイザーは、神話内で死と復活が描かれる若い男性神は「植物神」であり、その死と再生は植物の枯死と再生を象徴すると主張した。フレイザーは、ギリシア神話のアドニスとアフロディテなど「植物神」と「大地母神」が夫婦または愛人関係にあることを指摘し、その関係が、ピエタ像の起源でもあるとの仮説を立てた(『金枝篇』、1890)。ラーゲルレーヴ作品においても、しばしば、「大地母神」的な老女が、若い男性の「脚部障害者」を庇護し、再生させる。『イエスタ・ベルリングのサガ』では、酒におぼれた(真っ直ぐに歩けない泥酔者は、「脚部障害者」のヴァリエーションである)元牧師イエスタを、悪魔と契約しているとうわさされる老女「少佐夫人」が庇護する。『ニルスのおしぎな旅』では、魔法で「小人」に変えられた少年が雁の群と共に旅をする。群の隊長アッカは、老いた雌の雁で、白鳥たちの前で自分の醜い姿を恥じる場面があることから、「醜い老女」=「魔女」のヴァリエーションと考えられる。『エルサレム』においては、移住者たちを率いる老女ミセス・ゴードンが、教派の違う主人公イングマルを、自身のコロニーに招き入れ、農夫として成長させる。これらの作品の最後に、若い男性主人公は、老女の世界を去るか、その世界を破壊する。博士論文の第二部では、若い男性と老女の間を、新しいものが古いものを「克服」する関係として論じたが、今後は、両者の関係を「植物神と大地母神」の関係をにおわせるものとして捉えなおし、「大地母神」が、「脚部障害者」に自身の存在を拒否・否定されつつ生命を与える構造の意義を確認する。また、「醜い老女」と、ピエタの若く美しいマリア像の間に見られる、庇護者・「大地母神」としての機能の共通点・相違点とその変化の背景を考察する。

三点目は、セクシュアリティの問題である。「大地母神」はそもそも、豊穣・多産を司る女神であり、性をタブーとするキリスト教的モラルとは相反する存在である。また、フロイトやC.G.ユングは、脚を生殖器の象徴とし、オイディプスの母子相姦に典型的である通り、「脚部障害者」は、生殖行為や性的嗜好に問題を持つとした。申請者は、彼らの説の背景にも、官能性の象徴としてのサテュロス像・悪魔像、そして「大地母神」像があると考え、対象作品における「脚部障害」と(性的)モラルの逸脱の関係を、神話・民話におけるそれのみならず、当時の心理学的解釈と比較しつつ考察する。ラーゲルレーヴに関しては、近年、女性秘書S.エルカンやV.オーランダーとの書簡が公開され、彼女たちとの同性恋愛関係が明らかになった。作家自身は隠していた性的嗜好が、作中の「脚部障害者」その他の人物像にどのように反映されているのか、またそれが、「国民作家」としての作家自身によってどのように隠されているのかも考察の対象とする。

(2)預言・狂気

種村は、「ヒステリー患者の一過性の身体麻痺、とりわけ足の麻痺が巫女の予言的ヴィジョンと関係」しているとする。『エルサレム』において、「預言」能力を持ちながら「狂人」と見なされる女性イェットルードは、「軽やかに」歩くことを特徴とする、「地に脚のつかない」人物である。ここでは、ラーゲルレーヴとナチスの相違点の一つでもある、精神疾患への態度を神話・民話と比較しつつ考察する。

M.フーコー『狂気の歴史』(1961)によれば、狂人は、近代以前は「見世物」としてではあれ、社会に居場所

(研究目的・内容の続き)

があったが、近代以降、「精神病患者」として、「治療」の対象となり、病棟に隔離されて生活空間から排除された。ラーゲルレーヴは、フロイトやユングの精神医学に興味を持ち、『地主屋敷の物語』(1899)、『エルサレム』(1901-02)、『ポルトガリヤの皇帝』(1914)において、「狂人」を描いているが、時代が下るにつれて、「狂人」の表象は、「病人」から「預言者」へと変化する。最初の作品では、「狂気」は、「現実認識能力の欠如」として書かれ、「暗闇」にたとえられる。これに対し、後の二作品では、「太陽」が発狂の原因であり、「狂人」は、未来を見通し真実を見抜く「預言者」として描かれる。ギリシア神話の巫女カッサンドラは、太陽神アポロンに預言能力を与えられ、神がかり(コントロールを失って身体がよろめくことを、申請者は「脚部障害」のヴァリエーションと見なす)になって真実を語ったが、周囲の者からは信じられず、狂人とみなされた。ラーゲルレーヴ文学の「狂気」の表象を、北欧その他の文学およびギリシア神話におけるカッサンドラ・モチーフと比較し、その特色を明らかにする。

(3)ユダヤ人

種村の挙げる「脚部障害」のヴァリエーションのうち、民族主義と直接関わるのは、「放浪」であり、このことは、「祖国がない」、「定住しない」ユダヤ人にもあてはまる。北欧には、17世紀末からユダヤ人(セファルディム)の入植が始まり、ゲットーも存在した。20世紀には反ユダヤ主義が横行し、ナチス・ドイツ占領下のデンマークとノルウェーには、強制収容所も存在した。文学においては、19世紀以降、H.ヴェルゲランド、G.ブランデスなどユダヤ系作家の自伝的作品や、H.C.アンデルセン、J.V.イェンセン、P.ラーゲルクヴィストら非ユダヤ系作家の文学において、ユダヤ人が繰り返し描かれ、ステレオタイプ化された。典型的表象としては、「病」、「性的倒錯」、「アハスヴェルス(さまよえるユダヤ人)」などのモチーフが挙げられる(シュヌアバイン『ハイブリッドな他在』、2007)。また、アンデルセン『生きるべきか、死ぬべきか』には、「脚部障害」を持つロマの少年が登場する。一方、ラーゲルレーヴ作品に登場するスウェーデン人の「脚部障害者」は、最終的には同障害から解放され、「故郷」や「家庭」へと帰還する。「脚部障害」、「病」、「放浪」、「性的倒錯」というモチーフを軸に、ユダヤ人その他の異民族と、中世以来の「悪魔」や「魔女」の表象を比較し、スウェーデン人等自民族の「脚部障害者」像と対比することで、非ユダヤ人のナショナリスティックな「故郷」の概念が成立する過程と、「劣等民族」としてのユダヤ人像が成立する過程を明らかにする。この研究のため、ベルリンに赴き、資料収集およびシュヌアバイン教授とのディスカッションを行う。

(3) 研究の特色・独創的な点

次の項目について記載すること。

- ①これまでの先行研究等があれば、それらと比較して、本研究の特色、着眼点、独創的な点
- ②国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ、意義
- ③本研究が完成したとき予想されるインパクト及び将来の見通し

本研究は、日本における本格的な北欧近代文学研究の先駆的役割を担い、日本および世界の北欧文学・北欧学研究、ドイツ文学研究に対して、「ドイツ文学科出身の日本人北欧文学研究者」という申請者独自の立場から貢献する。

これまでのラーゲルレーヴに関する主要研究で、作品に対する神話や民話からの影響に言及したものは存在する(G.ショルツ『ラーゲルレーヴによるゲーテ的魔法モチーフの受容』、1968、H.ヴィーヴェル『雪の女王』、1990)が、神話・民話との共通点・相違点を詳細に論じたもの、作家の民話受容を民族主義と関連付けたものは見当たらない。北欧とドイツにおける作家の「お話おばさん」としての人気の理由を、民族主義に求め、神話・民話の原典と比較することで、作家の民族主義者としての一面のみならず、北欧の民族主義において神話・民話が果たした役割を解明しようとする本研究の試みは、他に類を見ない。その際に、「脚部障害」を中心軸として、作家論をヨーロッパ文明論へと展開させることも独創的である。また、近年のスウェーデンにおけるジェンダー的観点からの作家研究に対しても、本研究は、「大地母神」という太古以来の女性像をめぐる議論により、近代の女性論・女性解放論とは別の視点を提示する。更に、作家の人気の高さに鑑みて、彼女の民族主義のあり方を論じることは、北欧の民族主義の、歴史的・社会的・政治的研究にも貢献すると期待される。

日本の北欧学研究では、北欧は、福祉のモデルケースとして注目されるが、北欧における「障害者」の位置づけを文化的に解明した例はなく、本研究はその先駆的役割を果たす。また、作家の民族主義への論及は、日本における「ラーゲルレーヴ=平和主義作家」、「北欧=牧歌的な理想国家」というイメージにも一石を投じる。

日本のドイツ文学研究においては、ドイツ・北欧間の長い交流史にもかかわらず、「北欧」への言及や両文学の比較研究は極めて少ない。ナチズムへの反省に立って北欧近代文学の「障害者」を論じる本研究は、ドイツ文学研究において文学とナチズムを論じる際にも、重要な位置を占めるのみならず、ドイツ文学における北欧(文学)研究への論及の意義を示し得るものと考えられる。また、「ユダヤ人」ないしは「ユダヤ性」というテーマは、F.カフカやP.ツェラーンなどユダヤ系ドイツ語作家論と共通しており、このテーマを通じて、ドイツ・北欧両文学を比較する可能性を示すことができる。

特別研究員の任期終了後は、ドイツ語・文学の教員として、北欧文学研究の成果を取り入れた新しいドイツ文学の教育・研究を行いたい。また、将来的には、北欧近代文学の専門機関を創設したい。

申請者氏名 中丸 禎子

(4) 受入研究室の選定理由

受入研究室として選定した理由について、次の項目を含めて記載すること。

①受入研究室を知ることとなったきっかけ、及び、採用後の研究実施についての打合せ状況

②申請の研究課題を遂行するうえで、当該受入研究室で研究することのメリット、新たな発展・展開

※個人的に行う研究で、指導的研究者を中心とするグループが想定されない分野では、「研究室」を「研究者」と読み替えて記載すること。

受け入れ研究者である古澤ゆう子教授(一橋大学)とは、東京大学文学部のゼミナール「ドイツ語ドイツ文学演習」(2000年度・通年)を通じて知り合った。同ゼミナールは、ドイツ古典主義文学におけるギリシア神話由来のモチーフを、原典と比較しつつ考察するもので、近現代文学における民話・神話モチーフを原典と比較するという今回の研究計画の着想の一要因でもある。古澤教授とは、その後もコンタクトを取り、必要に応じて、参考文献の指示や論文に対するコメントを得てきた。今回の研究計画に関しては、教授を訪問の上、綿密なディスカッションを行った。「脚部障碍」とナチズムという、一見関連性の薄い申請者の諸関心が、中世の悪魔像、ギリシア神話のサテュロス像、およびナチズムにおける「障碍者」としてのユダヤ人像を介して互いに関連付けられたのは、このディスカッションによるところが大きい。

古澤教授は、ギリシア古典と近代ドイツ文学双方を専門とし、北欧の神話・文学についても造詣が深いことから、申請者は、これから対象とする神話・神話学についても、それらを近代文学と比較する方法や観点についても、豊富な情報・助言を得ることができる。また、ドイツのロマン主義は、ドイツの民族主義よりもむしろ、北欧の民族主義に強い影響を与えた(スヴェドゥイェダール教授の指摘)。18世紀のドイツ文学は、古澤教授の専門の範疇であり、申請者は、これについても、教授から必要な情報・助言を得られると期待している。

(5) 年次計画

(1年目)

博士論文をスウェーデン語で発表する準備をすると同時に、主に研究内容(1)を遂行する。

博士論文として書いた概説部分をスウェーデン語訳し、内容面では、スヴェドゥイェダール教授とディスカッションを行い、言語面では、G.ベッカー(「セルマ・ラーゲルレーヴ学会」秘書・元国語教師)の校正を受ける。原稿完成後、上記学会およびウプサラ大学で口頭発表し、彼らに出版社の紹介を受ける。これらの協力については、スウェーデン滞在時に約束済みである。

(1)に関しては、古澤教授の指導のもと、ギリシア神話におけるオイディプス、ヘパイストスなどの典型的「脚部障碍」と「大地母神」の関係を学術的に考察する。次いで、同じモチーフを北欧近代文学の中に探す。北欧では、1870年代に女性解放運動が起こり、80年代には、A.スクラム、V.ヴェネディクトソン、S.クレヴなど、多くの女性作家・思想家がデビューし、90年代以降のラーゲルレーヴ受容の素地となった。これらの女性作家における「大地母神」および「脚部障碍」モチーフを、彼女たちの女性解放論と関連付けて考察する。また、ラーゲルレーヴに大きな影響を与えたフロイトの同議論についても主要文献を観覧する。この成果を論文にまとめ、所属する日本独文学会、日本比較文学会、北ヨーロッパ学会のいずれかで口頭発表し、機関誌に投稿する。

(2年目)

主に研究内容(2)を遂行し、成果を論文にまとめ、上記学会で口頭発表または機関誌に投稿する。

古澤教授の指導のもと、カッサンドラ、太陽、狂気、預言に関するモチーフを扱う古典文学および近代北欧文学を比較・研究する。ギリシア神話において、太陽は、太陽神ヘリオスが駆る馬車とされるが、馬車は、脚部障碍を持つ神ヘパイストスの発明品である。昼と夜の間、また、大地または海と空の間を「往還」する太陽(神)も、「脚部障碍者」のヴァリエーションとして考察する。北欧神話については、太陽神フレイ(オーディン信仰によって支配された北欧太古の太陽崇拜の主神)と太陽が神格化された女神ソールを考察対象とする。

北欧近代文学に関しては、スウェーデンの作家フレーディングの作品を観覧する。G.フレーディングはラーゲルレーヴの親戚であり、彼の発狂はラーゲルレーヴの精神疾患への関心に影響を与えたとされる。また、具体的に「太陽と狂気」のモチーフ、また、不倫や兄妹の近親相姦など性的タブーを扱った作品として、イブセン『幽霊』を分析する。これら近代文学における太陽の描写と、夏至・当時など北欧特有の太陽と関連する行事に見られる太陽のイメージを比較し、北欧文学における「太陽」の位置づけを多角的に考察する。

(3年目)

研究内容(3)を遂行し、成果を論文にまとめ、上記学会で口頭発表または機関誌に投稿する。

シュヌアバイン教授のゼミナール「スカンディナヴィア文学におけるユダヤ人の表象」(2007年度冬学期)のリストをもとに、北欧近代のユダヤ人作家による文学、非ユダヤ人作家によるユダヤ人が登場する文学、およびそれらについての二次文献を観覧する。現在具体的に考えているのは、同ゼミナールで申請者自身が報告を行ったアンデルセン『生きるべきか、死ぬべきか』のユダヤ人とロマについての考察である。この研究のため、ベルリンに赴き、シュヌアバイン教授とのディスカッションおよび資料収集を行う。また、F.カフカやP.ツェラーンなど、ユダヤ系ドイツ語作家の「ユダヤ性」をテーマとして研究を行うC.イヴァノヴィチ客員教授(東京大学大学院客員教授)ともディスカッションを行い、場合によっては共同研究を行う。

申請者氏名 中丸 禎子

4. 研究業績（下記の項目について申請者が中心的な役割を果たしたもののみ項目に区分して記載すること。その際、通し番号を付すこととし、該当がない項目は「なし」と記載すること。申請者にアンダーラインを付すこと）

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書（査読の有無を区分して記載すること。査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限る。査読中・投稿中のものは除く）

① 著者（申請者を含む全員の氏名を、論文と同一の順番で記載すること）、題名、掲載誌名、発行所、巻号、pp 開始頁－最終頁、発行年をこの順で記入し、著者の所属・職については脚注に記載すること。なお、著者が10人以上にわたる場合は、主な著者^{*}を数名記入し、それ以外を省略（省略する場合、省略した共著者の員数と全著者の中で申請者が掲載されている順番を○番目と記入）してもよい。

（※著者に指導教員やコレスポンディングオーサー（論文責任著者）が含まれる場合は必ず記載すること。）

② 採録決定済のものについては、それを証明できるものをP. 10の後に添付すること。

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説

(3) 国際会議における発表（口頭・ポスターの別、査読の有無を区分して記載すること）

著者（申請者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること）、題名、発表した学会名、論文等の番号、場所、月・年を記載すること。発表者に○印を付すこと。（発表予定のものは除く。ただし、発表申し込みが受理されたものは記載してもよい。その場合は、それを証明できるものをP. 10の後に添付すること。）

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

(3)と同様に記載すること。

(5) 特許（申請中、公開中、取得を明記すること。ただし、申請中のもので詳細を記述できない場合は概要のみの記述でよい。）

(6) その他（受賞歴等）

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書
〈査読あり〉

- ① 中丸禎子（註1）「思い出す、忘れる、生きる—ゼーガース『死んだ少女たちの遠足』における記憶のあり方」、『詩・言語』、東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会、第57号、pp54-71、2002
- ② 中丸禎子（註2）「たそがれの物語—セルマ・ラーゲルレーヴ『イエスタ・ベルリングのサガ』における前近代的世界（前編）」、『詩・言語』、東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会、第61号、pp31-52、2004（註3）
- ③ 中丸禎子（註2）「たそがれの物語—セルマ・ラーゲルレーヴ『イエスタ・ベルリングのサガ』における前近代的世界（後編）」、『詩・言語』、東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会、第62号、pp1-21、2005（註3）
- ④ 中丸禎子（註2）「「無意味」に貫かれた生—クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・Tの追想』における「物語」の否定と「意味づけ」の拒否」、『詩・言語』、東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会、第65号、pp127-146、2006
- ⑤ 中丸禎子（註2）「太陽と死—サイドのカミュ論をヒントに、ラーゲルレーヴ『エルサレム』を読む」、『北歐史研究』、バルト・スカンディナヴィア研究会、第24号、pp96-108、2007
- ⑥ 中丸禎子（註2）「男性・農地・健康／女性・森・病—セルマ・ラーゲルレーヴ『エルサレム』における「血と大地」」、『詩・言語』、東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会、第70号、pp27-46、2009
- ⑦ 中丸禎子（註4）「死・救済・天啓—セルマ・ラーゲルレーヴ『エルサレム』における宗教運動の描写」、『詩・言語』、東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会、第71号、2009年7月刊行予定（採録決定済み、証明書添付、ページ数未定）

註：著者の所属・職（論文発表時）および備考

（註1）東京大学大学院人文社会系研究科院生（修士課程）

（註2）東京大学大学院人文社会系研究科院生（博士課程）

（註3）②と③は、一本の論文で、前・後二編に分けて掲載された。

（註4）東京理科大学理学部非常勤講師

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説

〈査読あり〉

- ⑧ 小澤実（註5）、松本涼（註6）、成川岳大（註7）、中丸禎子（註2）「中世アイスランド史学の新展開」、『北歐史研究』、バルト・スカンディナヴィア研究会、第24号、pp151-202、2007

申請者氏名 中丸 禎子

(研究業績の続き)

〈査読なし〉

- ⑨ 中丸禎子 (註8) 「狭間にある場所、異端の作家—セルマ・ラーゲルレーヴとヴァルムランド」(註9)、村井誠人(註10) 編『スウェーデンを知るための60章』所収、明石書店、pp.285-290、2009年5月刊行予定(採録決定済み、証明書添付)

註：著者の所属・職(発表時)および備考

(註5) 東京大学院生・国際医療福祉大学非常勤講師

(註6) 京大大学院生・日本学術振興会特別研究員(DC1)

(註7) 東京大学院生

(註9) 書籍全体の表記統一のため、作家名・出身地名が申請者の計画書内および他の論文内での表記とは異なっている。

(註10) 早稲田大学文学部教授

(3) 国際会議における発表

〈口頭発表(ドイツ語)、査読なし〉

- ⑩ ○ Teiko Nakamaru (註11) 「Selma Lagerlöfs Gösta Berlings saga als der Roman der Prämoderne (前近代小説としてのラーゲルレーヴ『イエスタ・ベルリングのサガ』)」、『ベルリン・フンボルト大学ドクターコロキウム』、論文等の番号なし、ベルリン・フンボルト大学(ドイツ)、2007年6月
- ⑪ ○ Teiko Nakamaru (註11) 「Zur Geschichte der Rezeption skandinavischer Literatur in Japan. Mit besonderer Berücksichtigung Selma Lagerlöfs. (日本における北歐文学の受容—セルマ・ラーゲルレーヴを中心に)」、『ベルリン・フンボルト大学ドクターコロキウム』、論文等の番号なし、ベルリン・フンボルト大学(ドイツ)、2008年1月

註：発表者の所属・職(発表時)

(註11) 東京大学院生、ベルリン・フンボルト大学客員研究員

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

〈口頭発表、査読なし〉

- ⑫ ○ 中丸禎子 (註2) 「たそがれの物語—セルマ・ラーゲルレーヴ『イエスタ・ベルリングのサガ』における前近代的世界」、『バルト・スカンディナヴィア研究会10月例会』、論文等の番号なし、早稲田大学(東京)、2004年11月
- ⑬ ○ 中丸禎子 (註2) 「この世だけの王国—セルマ・ラーゲルレーヴ『アンチ・キリストの奇跡』における信仰と大地」、『東京大学大学院ドクターコロキウム』、論文等の番号なし、東京大学(東京)、2004年12月
- ⑭ ○ 中丸禎子 (註2) 「セルマ・ラーゲルレーヴについて」、『北ヨーロッパ学会関東部会』、論文等の番号なし、文京学院大学(東京)、2005年6月
- ⑮ ○ 中丸禎子 (註2) 「セルマ・ラーゲルレーヴ『エルサレム』における近代化の表現」、『東京大学大学院ドクターコロキウム』、論文等の番号なし、東京大学(東京)、2005年10月
- ⑯ ○ 中丸禎子 (註2) 「太陽と死—サイドのカミュ論をヒントに、セルマ・ラーゲルレーヴ『エルサレム』を読む」、『東京大学大学院ドクターコロキウム』、論文等の番号なし、東京大学(東京)、2006年10月
- ⑰ ○ 中丸禎子 (註2) 「小説か、物語か—セルマ・ラーゲルレーヴ『エルサレム』における近代と前近代の混交」、『北ヨーロッパ学会若手研究会』、論文等の番号なし、立命館大学(京都)、2006年11月
- ⑱ ○ 中丸禎子 (註2) 「博士論文導入—「近代」というテーマについて」、『東京大学大学院ドクターコロキウム』、論文等の番号なし、東京大学(東京)、2009年1月
- ⑲ ○ 中丸禎子 (註8) 「ドイツ民族主義と「北歐」—「郷土芸術運動(Heimatkunstbewegung)」と「血と大地文学(Blut- und Boden-Literatur)」における北歐文学の受容」、『日本独文学会春季研究大会』、論文等の番号なし、明治大学(東京)、2009年5月

(5) 特許等

なし

(6) その他(受賞暦等)

なし

申請者氏名 中丸 禎子